かささぎ 通信 第86号

毎月第2金曜日 13：30〜15：30　　2019年　11月　8日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年十月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）所収の「鐘」「榎の僧正」を読みました。

「鐘」（初出『赤い鳥』一九三一年十月号）は、「森三郎の作品を読む会」ではこれまでに何回か取り上げてきた作品です。ラフカディオ・ハーンの〝The Soul of the Great Bell〟（一八八七年）を元にした子供向けの再話であることが分かっています。会では森三郎の「鐘」と兄・森銑三の「鐘のたましひ」やハーンの英語原文との読み比べもしました。（「かささぎ通信」第63号、第73号参照）

今号では「榎の僧正」（初出『赤い鳥』一九三二年十一月号）を中心に報告します。

「榎の僧正」と聞けば、『徒然草』四十五段の話を思い浮かべる人も多いことと思います。そこで「読む会」では『徒然草』の話との読み比べから始めました。

従二位藤原公世の兄・良覚僧正という人は大変怒りっぽい人で、住んでいる坊の傍らに大きな榎の木があったので「榎の僧正」と呼ばれていた。この名はけしからんと言って、その木を伐ってしまうと、あとに根が残っているので人々は「きりくいの僧正」と言った。いよいよ腹を立ててその根を掘り捨てさせると、そのあとが大きな堀になったので今度は「堀池の僧正」と呼ばれた。

『徒然草』の話はこれだけです。「きりくい」は切り株のことです。森三郎の話は良覚僧正と妙若丸という十五になる稚児の掛け合いで話を展開させています。『徒然草』原文に「腹あしき人（＝怒りっぽい人）」と書かれている良覚僧正について、森三郎の「榎の僧正」ではどんなに怒りっぽい人かを具体的に描写してあり、それを分かっている妙若丸が笑いながら「はいはい」と言いつけに従っています。

また、根元から伐り倒された大きな切り株を見て、「切り杭の僧正」と呼ばれる場面には、森三郎は新たに久方中納言を登場させてエピソードを作り上げています。そして怒った僧正が切り株を掘り取らせようとする場面では、そんなことをしても今度は「堀池の僧正」と呼ばれるに決まっていると、妙若丸に笑い飛ばされて話は終わっています。

森三郎には古典を元にしながら再話した童話がいくつもありますが、この「榎の僧正」は元になる古典からいかに話を膨らませるかという方法がよく分かる作品だと思います。当日集まったメンバーからは「妙若丸は知恵のある人ですね。位の高い人を笑い飛ばしている点が面白い」「妙若丸は気が付いているのに、僧正自身は気が付いていない点も滑稽ですね」などと自由な感想が出ました。

森銑三・柴田宵曲・池田孝次郎共著『日本人の笑』（一九四二年初版）の中で、柴田宵曲は『徒然草』のこの段を紹介した後「綽名を呼ばれるのに腹を立てて、そのもとを除いてかかろうとすると、そのたびに新しい綽名が出て来る、そこに軽いおかしみがあります」と書いています。そして「あとになって見ると、最初の榎の僧正が一番よかったということも面白いですが、兼好が何の批評も教訓も付け加えていないのは、淡々としていていい」と続けています。宵曲は「最初の榎の僧正が一番よかった」という話と解釈していますが、三郎がこの話を「堀池の僧正」とせずに、「榎の僧正」と題名を付けたところにも宵曲と同じような感性がみて取れます。

「徒然草」のこの話が元になったという江戸落語「あたま山」や、絵本「あたまがいけ」（日野十成再話、斎藤隆夫絵「こどものとも」二〇一四年三月号）のことも話題になってこの日の会を終えました。

次回「森三郎の作品を読む会」　十二月十三日（金）　午後一時半〜三時半

「夜長物語」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）